

目次

第一章 世界の分断を俯瞰する

冷戦の崩壊が秩序の崩壊をもたらした

対立軸を見失った世界

分断を目の当たりにして

情報弱者の日本人

新型コロナウイルス報道と「分断」

国家が一元的にメッセージを発したトルコ

スウェーデンとムスリム社会との新型コロナウイルス対応の違い

分断を防ぐメッセージを発したニュージーランド

弱い立場の人の声は誰が伝えるのか？

第二章 「テロとの戦い」が世界を分断した

「イスラーム報道」と「文明の衝突論」

第三章

ヨーロッパの分断、ヨーロッパとの分断

「テロとの戦い」は行き詰まった

「文明vs.野蠻」による世界の分断

アフガニスタン侵攻をめぐるメディアの姿勢

恣意的に使われた「テロとの戦い」

凶悪な「テロ組織」に対する報道の一面性

「テロとの戦い」に飲み込まれたメディア

難民危機によるヨーロッパの分断

イスラーム嫌悪とユダヤ嫌悪

メディアは異質な人間の到来をどう伝えたか？

難民を移民にすり替えたヨーロッパのメディア

難民受け入れ国の窮状は伝えられなかった

分断を見過ごしたのか、それとも無視したのか？

第四章 トルコ・バッシング

トルコはなぜ嫌われたか？

シリア内戦と「イスラーム国」の台頭

米・ロの代理戦争という誤認

「国を持たないクルド人」の戦い

トルコとクルドとの関係は永遠の抗争か？

対クルド政策を変えたエルドアン政権

クルド武装勢力に対する掃討作戦

アメリカの裏切り

グラハム上院議員の本音、トランプ大統領の果たし状

フェイクニュースの波状攻撃

トルコは「イスラーム国」を支持したのか？

リアルポリティクスの主役はロシア

バグダーディー殺害の闇

第五章 中東世界の独裁者たちとアルジャジーラのメディア戦

エジプト、二分されたクーデタの評価

中東・イスラーム世界の崩壊を報道し続けるアルジャジーラ

アサド政権の暴力を追及する

アサド大統領の巧妙なメディア戦略

世界はいかにしてジャーナリスト殺害事件を知ったか

ムハンマド皇太子を追い詰めたアルジャジーラ

ムハンマド皇太子のメディア戦略

タンカー攻撃の闇

ソレイマニ司令官暗殺

第六章 市民のメディアが持つ分断修復の可能性

武器としてのSNSの両義性

アルジェリアのしなやかな「運動」

市民運動は変化する。変化に応じたメディアがある

分断を生きる人間の姿を伝える

第七章 パンデミックがもたらす新たな分断

グローバルな危機と分断の深刻化

難民や移民もまたパンデミックの犠牲者

新たな分断のはじまり

宗教とパンデミック

グローバルな危機下、自分を守るために

おわりに

はじめに

紛争、内戦、戦争、排外主義……。冷戦が終焉しゅうえんを迎えた一九九〇年から二〇二〇年までの間、世界には、いくつもの分断が生まれました。そして二〇一九年冬以降、忽然こつぜんとして世界規模で吹き荒れた感染症、新型コロナウイルス（COVID-19）禍は、差別、格差の拡大と分断に拍車をかけています。

分断は、必ず強者によって行われますが、弱者は分断によって、より過酷な状況に追い込まれます。「弱者」は英語で、vulnerableと言いますが、絶対に弱いのではなく、傷つきやすいという意味での弱者です。分断は、傷つきやすい人びとを排除する結果をもたらします。最初からそれが目的で分断の線が引かれることも少なくありません。だからこそ、分断を少しでも修復するには何が必要なのかを考えなければなりません。

私たちは普段、メディアを通じて世界で起きているさまざまな事象に関する情報を得ます。インターネットが普及する以前は、新聞やテレビのようなマスメディアが主流でした。ジャーナリストたちは、世界を飛び回ることで事件や戦争を取材し、報道してきました。二〇世紀に

おいては、こうしたジャーナリストの仕事が世界を知る上で大変大きな貢献をしたことに疑いの余地はありません。

マスメディアは世界に分断をつくりだすためのプロパガンダにも使われます。世界には、国営の通信社やテレビ、ラジオなどを持つ国がいくつもあります。国営メディアというものは基本的に国策に従います。異なる視点からの報道を強く規制している国もあります。

その一方で、政府の見解とは異なる主張をすることができるところでも、知らず知らずのうちに、一つの方向に報道が誘導されていることがあります。そして、言うまでもなく私企業としてのメディアはスポンサーの意向に左右されることがありますし、時の権力を付度した報道そんたくをすることもあります。

イスラームに関連したトピックは、この問題がよりグローバルに表出する典型です。巨大な文明圏を単位とするプロパガンダが行われるのです。この場合、「あの国だからこんなことを言うのだ」というほど単純な問題ではありませんので、見逃されることが多くなります。「アメリカのメディアでもフランスのメディアでも同じことを言っているのだから、きっとそうなのだろう」という話が、実は異なる文明圏から見るとまったく別の構図に見えることがあるのです。

情報をどこから得ているのか。どんな姿勢で起きている現象を見ようとしているのか。日本では、外国に関する報道は、たいていの場合、欧米諸国の有力メディアと歩調を合わせる人が多いようです。それが、自分自身の目で見えて、現地の人々の声を聞いた上での報道なら、それでよいのです。しかし、予備知識もない地域で起きる事件、紛争、災害などについて、現地の人々の話を直接聞いて取材できるジャーナリストがいったいどれくらいいるでしょうか。現実には、ほとんどいないはずです。英語のできる助手を使って取材をする。向こうから何かを訴えたくて近づいてくる人の声を拾う。それがいけないとは言いませんが、ここに問題が隠されています。

特に、紛争や内戦のように、利害の対立する集団が争っている場合、双方の当事者の声を聞き、背景となつている歴史を学び、それから報道するジャーナリストは、ほんのわずかしきません。しかも、彼らが確信をもつて、多量の報道機関とは違う姿や声を拾い上げたとしても、組織としての部局や本社はどうでしょう。いや、そんなことはないだろう、そこまで言えるのか等々、紙面でも番組でも、上に判断がゆだねられるにつれて、守りの姿勢が強くなり、現場の生々しい情報は、トーンダウンし、角の取れたものになっていきます。

本書では、研究者としての知見だけでなく、私がこれまで新聞や報道番組でコメントしたと

きに考えたことを基もとにしています。私はプロのジャーナリストではありませんが、ジャーナリズムの周縁しゅうえんにいて、多数のメディアとつきあいました。PRESS（報道）の許可証を取って難民キャンプなどの現地に入り、当事者にインタビューをしたこともありますし、パリ、ベルリン、イスタンブールなどから中継でテレビのニュースでコメントしたこともあります。

そこで話したことが、東京サイトで予定していた筋書きと違って、本社の方がずいぶん慌てたこともありました。私はひとりの研究者で、そこで何を話しても企業としてのマスメディアの見解ではありませんから、さほど問題にはなりませんでしたが、メディア企業の社員としての記者やディレクターたちは、ずいぶん苦勞くろうしていることも知っています。

インターネットを介した情報が溢あふれる今、誰もがどこにいても、あらゆる言語による世界の情報にアクセスすることが可能になりました。しかし、情報を得られたとしても、溢れる情報を精査し、その信憑しんぴやう性はどの程度あるのか、どの角度から見たらそう見えるのか、その視点は誰のためのものか、それらを知らないままでは世界で起きていることを理解できません。

さて、新型コロナウイルスによる感染症の拡大は、まさしくグローバルなもので、人種、民族、宗教、そして国も選びません。しかし、危機に対するグローバルな協力よりも分断の方が目立ちます。初期の段階から、アメリカでも日本でも、感染が中国から始まったことを非難す

る声、「生物兵器ではないか」という陰謀論に加えて、欧米ではアジア系の人に対する差別が一気に噴き出しました。アメリカのトランプ大統領は、新型コロナウイルスを「中国ウイルス」と呼ぶことに固執し、「世界保健機関（WHO）が中国中心主義だ」と非難を繰り返しました。

ヨーロッパ諸国もまた、この感染症によって大きな犠牲を払いました。五月七日、イギリスのスカイニュース（sky news）が、イギリスでの新型コロナウイルスによる死者は、黒人が白人の四倍に達するという国立統計局のデータを報じました。パキスタン出身者とバングラデシュ出身者の死者は、男性で白人イギリス人の三・六倍、女性で三・四倍だったそうです。インド出身者の場合は、男性で白人イギリス人の二・七倍、女性で二・四倍、中国系では男性で白人イギリス人の一・九倍、女性では一・二倍だったということです（Coronavirus: Black people four times more likely to die with COVID-19 than white people-ONS, ONS = The Office for National Statistics）。

イギリスのエスニック・マイノリティは、インド、バングラデシュなど、旧イギリス植民地やカリブ海地域出身の移民が多く、黒人はアフリカの旧植民地出身者が多くを占めています。イギリスの移民たちは、同じ母国を持つ人びと、同じ宗教の人びとが一つの地区にかたまって住んでいました。当然、親族や知人との往来も濃密になります。そのため、今回のような感染

症が起きると、同じ地区の中で感染が拡大したようです。さらに、貧困の問題や医療へのアクセスの難しさ等が背景にあります。ここには、一つの国の中での貧富の格差や人種、民族、宗教による分断が、新型コロナウイルスの感染症によって生死を分かち重大な境界になってきたことが現れています。

そして、この新型コロナウイルスによるパンデミックの衝撃があまりに大きすぎて、私たちは、テロ、内戦、難民、移民等、深刻な問題に直面していたことを忘れてしまいがちです。

パンデミック以後の世界。それは、パンデミック以前からの分断を修復する方向には進まないとい私は考えています。残念ながら、分断はより深刻なものとなり、新たな衝突を生むことになるでしょう。

一方、メディアは、分断を激しくすることも、修復することもできません。いずれの役割を果たすのかは、メディアを通じて報道するジャーナリズムにかかっています。

本書では、冷戦が終わってからおおよそ三〇年の間に生まれた内戦や戦争等の暴力の問題から、今、私たちが渦中にあるパンデミックに至るまで、私がこれまでに中東やヨーロッパで見てきた出来事をいくつか抜き出して、メディアが果たした役割を考えてみます。

冷戦後の世界では、民族による対立、宗教による対立などが複雑に絡み合っています。そ

の結果、対立するあらゆる勢力による「プロパガンダ戦争」が展開されてきました。衝突している当事者が持っているメディアは積極的にプロパガンダを発信します。当事者たちは、世界の流れを自分たちに有利にするために他のメディアを誘導します。「プロパガンダ戦争」の真の問題はここにあります。キーワードは「迎合」と「抵抗」です。メディアは、巨大な政治的なうねりに迎合することもあれば、抵抗することもあるからです。

本書に紹介していくのは、今、展開されている「プロパガンダ戦争」に対する私の見立てです。別の視点から見たら、異なる見立ても成り立ちます。そのことを前提とした上で、パンデミックの渦中とその後の世界を生き延びるための一助としていただければ幸いです。